

あること、第二に、現在のブラジルの環境がバランスが十分に機能していないとするならば、その原因の一端は政権交代に伴う政府と社会の意思決定により、国家と社会のつながりが分断されてしまったことにある、ということである。

本書が出版された後、本書を手に取り「この本自体がまさに人と人とのつながりの賜物のようですね」という温かな言葉をかけてくださった方がいたのが筆者にはとても嬉しかった。本書の元となる博士論文の構想を発表したのが2012年頃だったから、それから紆余曲折をへて出版に至るまで、10年の歳月を要してしまった。博士論文を書き始めた頃、「博論は書きたいことしか書けないよ」と既に博士論文を書き上げていた研究室の先輩に言われた。「本当にそうかな」と当時は懐疑的であったが、改めて本書を読み返してみると、自分が言いたかった主張だけでなく、自分の性格までもが透けて見えてくるようである。国際関係論と地域研究の二束の草鞋を履いてきた筆者にとって、振り返ってみると博士論文の執筆は、現実世界で起きている現象の原因を知りたいという欲求とともに、「自分とは何か」という内的世界の探索活動とも密接に関係していたから、その意味で先輩の言葉は正しかったのだと実感している。研究活動を通じて知り合った人たちとのつながりが現在の筆者にとって、何よりの財産である。その経験が本書を通じて重大な選択にせまられた後進の研究者たちの背中をおすことにつながるのであれば、望外の喜びである。 ■

『開発との遭遇—第三世界の発明と解体』（アルトゥーロ・エスコバル著、北野収訳、新評論、2022年） 独協大学・北野収

## 1. はじめに

開発学の現代の古典、アルトゥーロ・エスコバル著『開発との遭遇』（原書初版1995年、2012年増補版2011年）の待望の日本語訳が完成した。既にスペイン語版や中国語版が出版されてきたなか、日本語版の登場は遅すぎた感がある。初版から四半世紀以上が経過し、この間にラテンアメリカも、世界も大きく変貌した。特に自らポスト構造主義者といっってはばからないエスコバルの本について、「この2020年代に、今さらポスト構造主義？寝ぼけているのか？」と感じる人もいるだろう。だが改めて手許の訳稿を眺めると、本書のメッセージには時代を超えた普遍性があると強く確信する。2012年増補版からも既に10年が経過したが、増補版に新たに追加された第7章を読むだけでも価値があると思う。

エスコバルはコロンビア共和国出身の人類学者である。母国で化学工学、アメリカで国際栄養学を修め、短期間だがコロンビア政府で栄養政策に従事した後、人類学に転向した。本書の元になっているのは、カリフォルニア大学バー



クレー校に提出した Ph. D. 論文である。長らくノースカロライナ大学チャペルヒル校人類学教授を務め、現在は名誉教授である。本書の出版以降、彼は批判開発学・ポスト開発論という新しい潮流を牽引する存在（ラテンアメリカ学派ともいわれる）となり、さらに、その後の研究によって、それらをポリティカル・エコロジー（政治生態学）、ポリティカル・オントロジー（政治的存在論）研究へと発展・昇華させてきた。

元々、技術系の勉強をした後、政府で政策プランニングの仕事に就き、憧れも含めて、政府機関の奨学金を得て2年間のアメリカ留学。その後、一旦自国の政府の仕事に戻ったものの、仕事に違和感を覚え、再度渡米し批判研究に転身する。エスコバルと私＝訳者が歩んできた道は驚くほど似ている。行間や表現の端々、脚注にさらっと書かれたことなど、彼の憤りはあたかもかつての自分のなかにあったそれらとほぼ同じと感じる程の共感を覚えた。私は元々農学徒（農業経済学、農政学）であったが、開発経済学や開発プランニングをかじりつつ、国家公務員（農林水産省）になった。このようなエスコバルとほぼ同じ体験を経た現在の関心は、批判開発学（国際協力史の批判的研究など）、食料農業問題（国際フードポリティクスなど）、内発的發展論（途上国と日本の両方をフィールドとする）、連帯経済論（特にフェアトレード）である。

以下、若干自意識過剰で独善的な物言いがあられるかもしれないが、最後までお読みいただければ幸いです。

## 2. 翻訳に至った経緯

私は2008年に『南部メキシコの内発的發展とNGO』（補訂版2019年）を上梓した後、このままフィールド研究を続けるか、同書で遭遇

したポスト開発論を軸にした理論面の勉強という新境地を開拓するか自問を続けた。それまでに、フィールド系の単著2冊、編著1冊を上梓したが、ちょうど2009年頃から書き始めた『国際協力の誕生』（2011年、改訂版2017年）の執筆が思いのほか楽しく、抽象的な思考を巡らせることの知的な喜びを知った。

翻訳を前提に1995年初版本を読み返し始めたのが2011年。意を決して、メキシコの友人グスタボ・エステバ（大地の大学）の紹介で、エスコバルに翻訳出版のオファーをしたのが同年秋であった。年末に、出たばかりの2012年増補版がエスコバルから私の許に送られてきた（2012年増補版とあるが、実際には2011年に出版されている）。これで覚悟は決まった。エステバ先生は、本書の完成の直前、2022年3月17日にご逝去された。ご冥福を祈ります。

## 3. 「命を削り続けた」10年間

エスコバルからのメールには「大変な作業になるが、本当に大丈夫か」という念押しの一文が添えられていた。その言葉の意味は、今、あらためて振り返ってよくわかる。下世話な言葉でいえば、この10年間、命を削りながら作業を進めてきた。両方経験された方はお分かりだと思うが、自分で執筆するのと翻訳するのでは、物理的にも時間的にも、求められる表現スキルや専門的知見の面でも、実は後者の方がはるかに大変だ。

この間、幾度となく入院をしたり、学内で「長」のつく激務の役にも2度就いた。長年にわたり、家族の病気とそのケアにも多大な時間を割いてきた。ただでさえ、用務の多い中堅私学のフルタイム教育「労働者」である。この間、単著書の出版は無理だったが（博論修正本、増補改訂本を除く）、共編書1冊（近刊）、単訳書2冊、分担執筆章9本とそれなりのペースで頑張ったつ

もりだ。我ながらよく気力と体力が続いたものだと思う。

全体の訳稿ドラフトが出来たのが2018年夏、そこから編集者との3年に渡る日本語キャッチボールが始まった。中米をフィールドにする佐藤峰先生（横浜国立大学）にも、ドラフトの添削をしていただいた。同時進行で、6万字強の訳者解題を3年間書き続けた。最終的にA5版で539頁にもなったテキスト全体について、ドラフトの推敲から最終校正までの過程で、都合約20回の徹底的な推敲と書き直しが繰り返された。実はこの原稿は再校作業と並行して書いているが、この時点でも、ネパール語の綴り、スペイン語圏、ポルトガル語圏、アフリカなどの事項・人名・地名のカタカナ表記の乱れ（ばらつき）など次々と細かい調整が必要になり、その都度対応に追われている。本文だけでなく、膨大な訳注や補訳文、各章扉裏に配した読解の手引き、解題論文も読んでほしい。ただ訳すだけでなく、それぞれの頁ごとにどれだけのエネルギーを注いだか、紙面から感じ取っていただけたと思う。

正直、この仕事はキツ過ぎた。自分の健康、家族、余暇などありとあらゆるものを犠牲にせざるを得なかった。検査での各種数値は勿論のこと、一時は、手がしびれて麻痺し、杖がないと歩行できない程に健康は悪化した（確実に3年は寿命が縮まったと思う）。無理が利かない年齢になって、久しいことを痛感した。

それでも続けて来られた理由は4つある。1つめは、アメリカ留学時代にある教授から「プロの研究者ならクリスマスでも正月でも毎日、書くことを怠ってはいけない」と言われたことである（拙訳書、F・ヴァンデルホフ『貧しい人々のマニフェスト：フェアトレードの思想』あとがき）。2つめは、世界にはまだまだ紹介

しなくてはならない文献があり、そのような文献を紹介することは、自分の業績としての著書や論文を書くよりも、より重要な社会貢献になると信じているからだ。3つめは、どんな些細なことでも、世界のどこにしようと、直ぐに質問メールへ返信を下さったエスコバルのある種のメンタル・サポートであった。4つめは、編集担当の山田洋さんが徹底的にコミットして下さったことである。

たとえ私学であっても、給料の半分は税金である。非常勤講師やPDの人からみれば特権階級ともいえる常勤の専任教員には、学生に対する責任は当然のこととして、どんな形であっても、少なくとも知的生産活動を通じた社会還元義務があると思う（翻訳を含める）。南北問題やグローバル経済をみれば誰でも分かることだが、エリートというのは踏み台になり搾取される人々がいるからこそ、その特権を享受もしくは謳歌できるのだ。この構造的暴力自体容認すべきものではないが、特権には相応の義務を伴うはずだ（もちろん大学序列ピラミッドの最上位に君臨する超特権の方々には、さらに相応の義務が加わって然りだろう）。教室や論文のなかで、いかに「平和」「平等」「正義」「共生」を叫ぼうとも、特権の上にあぐらをかいていることに対する自戒の念は忘れたくない。元公務員として、また、現職に辿り着くまでにかかなりの苦勞をした人間の1人として、（校務や教育がどんなに大変だとしても）週3日授業をやって会議にでているだけでは、税金泥棒（そし）の誇りを免れないと考えている。本書の重要なキーワードの1つとして「存在論（オントロジー）」があるが、このことは、研究者・大学人としての存在論的命題ともいえる。

#### 4. 内容

出版社によるコピー「人間・生物・自然を破壊する『持続可能な開発言説』（＝知のシステム）の本質を説き明かし、『開発に対するオルタナティブ』を提起した開発学の現代の古典」が、本書の位置付けを的確に表現している。以下、私が書いた出版社の紹介文から本書の内容を抜粋的に紹介したい。

エスコバルは「現実」とされる現象は特定の政治的関心によって秩序化された言説・表象であることを前提に、「フォーコーの生権力概念を大胆かつ明確に現実世界に投影させ、『開発の民族誌』を編んでいく。本書は南米コロンビアを実験地として、世界銀行調査団という『黒船』がこの国に入って以来（1949年）の、3つの生権力の物語を軸に展開される」。第1は「成長と資本をめぐる物語」である。現実の分析から理論を導き出すのではなく、理論によって単純化・カテゴリー化したものを「現実」として見なす「言説製造の仕組み」としての開発経済学の存在が明らかにされる。第2は「食料と飢えをめぐる物語」である。海外援助を受けた農村開発や栄養改善プログラムが国の隅々にまで官僚組織制度を張り巡らせ、<sup>インストゥルメンタル・エフェクト</sup>媒介道具的効果を浸透させていく。第3は「小農民と女性と自然をめぐる物語」である。新たな開発フロンティアとして、農民が生産者、女性が追加労働者、自然が資源として、「開発のまなざし」によって切り取られ、開発の幻想は果てしなく進化していく。

結論をまとめれば、開発、農村開発とは官僚政治である。社会の隅々まで、あらゆる事物や想念が官僚が作り出した基準によって「アーティキュレート」されていき、そのことがあたかも自明なこととして空気のように広がり、在り続ける。しかも、それは生き物のように変化し続ける動態的なプロセスである。この生権力に抗

うことは容易ではないが、コロンビアの農村を始めとする第三世界（特に、アフロ系農民、先住民族）には、したたかにハイブリッド化しつつも、100%官僚政治に染まることはない、自治の空間（ジェームズ・スコットのいえばアナキスト空間）が存在し続けている。

2012年増補版で追加された第7章では、ブエンビール（アンデス先住民の価値観としての「善き生活」）、自然の権利、<sup>パチャママ</sup>トランジション言説（トランジジョンタウン運動など）、ブルーリバース（多元世界）など、その後の研究につながる新基軸が述べられる。ブルーリバースにおいては、<sup>リレーショナル・オントロジー</sup>関係論的存在論、すなわち人間と自然、人間同志という関係性のなかで人間は「人物」として存在する。そこには、<sup>ホモ・エコノミクス</sup>合理的経済人という人種は存在しない。そこには、第三世界の少なくない人々が身を置いてきた世界観・関係性・存在論が今でもリアルに息づいている。ハイブリッド化したコムニダとその文化こそが、ブルーリバースに向けた再構築のための萌芽なのである。目次は、以下のとおりである。

日本語版序文Ⅰ 「開発との遭遇」日本語版に寄せて（A・エスコバル）

日本語版序文Ⅱ 近代の普遍性を解体する（M・ドリスコル）

序文

第1章 序論：開発とモダニティの人類学

第2章 貧困の問題化：三つの世界と開発をめぐる物語

第3章 経済学と開発の空間：成長と資本をめぐる物語

第4章 権力を拡散する：食料と飢えをめぐる物語

第5章 権力と可視性：農民と女性と環境をめぐる物語

第6章 結論：ポスト開発の時代を構想する

第7章 2012年版への追補

解題 ポスト開発の先にある多元世界の展望（北野）

訳者あとがき

以上から分かることは、実は、本書はラテンアメリカ地域研究の本でも国際開発の本でもないということである。この本は、現代に生きる人間が、開発イデオロギーのなかで呼吸し、開発のメガネと開発の眼差しで物事を観て、開発の度合の薄い事物・人々を劣等視し、他方で自身の想念と魂が植民地化＝汚染されていることに、全く気付いていないという喜劇的な構図（裸の王様あるいはモルモット）を、第一世界に住むとされる私たちに、さらけ出す企てである。

この日本語版の特徴は、①各章ごとに訳者による概要およびキーワードの説明を付したこと、②可能な限りの膨大な訳注を設けたこと、③章扉にコロンビア研究者の幡谷則子先生（上智大学）他が撮影した写真が挿入されていること、④原著にあった誤記や分かりづらい箇所を著者に連絡をとり、内容照会の上訂正したこと、⑤エスコバルから発せられた「日本人への問い」に対する私の回答としての解題論文（2段組み40数ページ）を収録したこと、である。エスコバル、日本語版序文Ⅱを寄せて下さったマーク・ドリスコル教授、私は、ともにコーネル大に学んだ共通体験を持つ。

## 5. 読者へのメッセージ

本書の主たる読者は人類学徒、とりわけラテンアメリカをフィールドにする方々が想定されるが、実は本書の潜在的な読者層はそれに止まらない広範な分野への貢献が期待される。

第1に、人類学徒には、「民族誌とは何か」について是非考えていただければと思う。ある特定

の地域社会に長期滞在し、寝食を共にしながら、当該社会文化に関する分厚い記述をすることが民族誌アプローチだと一般には考えられている。また1990年代以降、プロジェクト・エスノグラフィという、現場で開発事業に携わりながら、プロジェクト内部のコミュニケーションや受益者の参与観察を克明に記録していくアプローチも用いられるようになってきた（Uphoff 1992；小國 2003）。人類学者エスコバルによれば本書も「民族誌」である。しかしその対象は、戦後コロンビアの開発全体、つまり「国づくり」そのものである。これが、エスコバルが「開発の民族誌」「制度の民族誌」と呼ぶアプローチである。本書は「政策史」というよりは「民族誌」なのだ。

第2に、主流の開発経済学・国際開発論を修めた**開発実務者・アドミニストレーター**に読んでいただきたい。そこには、国際機関、政府機関、開発コンサルタント、NGOに勤務する人々が含まれる。このような人々にとって、エスコバルのテキストは「存在否定」ともとれる辛辣なものかもしれない。だがイントロで拒絶せずに、騙されたと思って最後まで読んでほしい。読後に、エスコバルの主張にたとえ1%でも同意できる部分があったかどうか、自問していただきたい。この私自身、かつては政府機関の職員として、開発を計画し実施する立場にあった。エスコバルのテキストを読み、若かりし頃を思い出しながら、「ああ、そうそう」と、思わずニヤリとしてしまう瞬間が幾度となくあった。おそらく、対話はそこから始まる。

第3に、農学、栄養学、土木工学、保健医療などを修めた**開発に携わる技術者**に読んでいただきたい。ここには、JICA 専門家、技術系開発コンサルタント、NGOの技術者、日本国内で同様の仕事に携わる人々が含まれる。技術系の読者

に読み取っていただきたいのは、科学技術、知のあり方に関するエスコバルの洞察に満ちた議論である。近代的な「科学知」「還元主義」、細分化された「専門知」の絶対性に対する重大な問題提起が、「暗黙知」「経験知」「土着知」および知のハイブリッド化に関する事例をもって展開される。中立で客観的（脱政治的）だと思われる近代科学自体が、開発のポリティクスから自由になることはできない重大な政治性を帯びている。

第4に、本書は近現代の「グローバルヒストリー」の一部を成す。ここでいうグローバルヒストリーは、西洋中心の世界史観でない視点からの世界の歴史という意味である。とりわけ現代においては、アメリカ中心の世界史観が圧倒的な地位を占め、それから自由になること、それ以外のチャンネルで世界のことを知ることはほぼ不可能ともいってもよい状況にある。本書は、アメリカの視点に基づかない視点、つまり現在の言葉でいうところのグローバルサウスの視点からみると、ラテンアメリカ、アメリカ（合衆国）、世界はどのように映るのかに関する最も洗練された著作の1つであろう。

第5に、国際関係論とりわけアメリカとラテンアメリカとの外交関係について日本語で読めるそれ程多くない学術書の1冊である。アメリカの事実上の「支配下」にある国際機関（世界銀行が代表）も経由しながら、冷戦期のアメリカがどのような第三世界政策——とりわけアメリカの裏庭でありつつも、潜在的な社会主義勢力が存在するラテンアメリカ政策——を展開したのか。開発は常に反共政策と表裏一体であったし、根底にあるのは人道的関心よりもヘゲモニーだったのだ。末端の草の根に至るまで、「箸の上げ下ろし」「国民アイデンティティ形成」という次元で徹底的に介入したという事実につい

て詳細に記述した本書を、国際関係学徒にも是非読んでいただきたい。本書は、他の第三世界、アジア、アフリカに対するアメリカの介入との比較検討のための最良の素材だと思われる。

第6に、日本の農政や地域づくりに関心がある方にも是非お読みいただきたい。それは、コロンビアがアメリカの実験国家であるのと同様、日本もそうだからである。コロンビアの戦後の開発経験は、日本のそれに酷似している。このことに関する私の分析は、解題論文の後半にかなりの紙幅を割いて詳細に論じた。

第7に、近代＝モダニティとは何かについて、他のどの分野よりも深く向きあってきたであろう現代思想やフランス哲学徒は、エスコバルの分析をどのように読むであろうか。社会学徒や観光学徒に、エスコバルと同様、フーコー理論を現実社会の分析に援用したジョン・アリーの「観光のまなざし」と比較していただくのも結構なことだ。近代＝モダニティの構築性・虚構性を種明かし（脱構築）して「ハイ、おしまい」ではいけない。エスコバルは出口戦略を示している。それは、下からの対抗言説の積み上げ、対抗的な表象の逆構築である（脱構築ではない）。この逆構築こそが、日本語でいうところの「内発的發展」なのだ。

最後に、このグローバル資本主義の時代に生きる**全ての人**にとって本書は重大なメッセージを発している。私たちが自明のこととして前提にしている概念や決まり事のほとんどは、近代化＝開発のなかで、統治の手法として造り出され、付与されたものである。開発の論理とは、資本の論理、国家の論理、近代化された父権制の論理、自然（生命）に対置される人間と科学の優位性の論理である。まるで放射能汚染に気付かない／を気にしないように、言語、食、アイデンティティ（「らしさ」「であるべき」）、同調圧

力、幸せの定義にいたるまで、ありとあらゆる事柄において、想念の植民地化が進行している。いうまでもなく、人間関係、友情・恋愛、家庭・家族、教育も全て開発の論理に包摂され尽くしてしまったのである。その意味において、やはり開発の時代＝近代は人間の歴史の中で特異な時代であり続けている。本書を読み、「開発のメガネ」を外せば、それまでと全く異なった日常が見えてくるだろう。その意味において、本書は開発の本というカテゴリーを超越して、いくつかの批判系の名著（アンダーソン『想像の共同体』、サイード『オリエンタリズム』、バトラー『ジェンダー・トラブル』、アーリ『観光のまなざし』など）と並ぶべき現代の人文社会書の古典でもある。

この作業の先に、2012年版で追加された第7章の主題「プルーリバース（多元世界）」がある。プルーリバースとは、ユニバース＝単一の世界に対する対抗言説でもある。第7章は、その後に出版された最新刊 Escobar (2018) の予告編でもあった。

## 6. 最後に

開発研究者・国際農学者であり、ラテンアメリカ地域研究者ではない私ではあるが、この本を自分のなかで、『南部メキシコの内発的発展とNGO』と『貧しい人々のマニフェスト』と合わせた「ラテンアメリカ三部作」と勝手に位置付けている。北米や日本との比較を通じて、ラテンアメリカから多くのことを学ばせていただいたと思う。

エスコバルの業績は本書を含めた3冊の単著書に集約される。デビュー作の本書に続くのは、2008年の *Territories of Difference: Place, Movements, Life, Redes*（スペイン語版は2016年、*Territorios de diferencia. Lugar, movimien-*

*tos, vida, redes*）と2018年の *Designs for the Pluriverse: Radical Interdependence, Autonomy, and the Making of Worlds* の2冊である。この2冊についても、遠くない将来、日本語版が出ると聞く。1人でも多くの地域研究者が翻訳という陽の当たらない知的営みに興味をもって下さることを願っている。

定価からいって、たとえ公費であっても、本書の個人購入をお願いすることはとてもできない。絶版になる前に是非、最寄りの公立図書館、勤務先・出講先の大学や研究所の図書館への蔵書リクエストを切にお願いする次第である。いうまでもないが、発行部数はそれほど多くはない。

## 参考文献

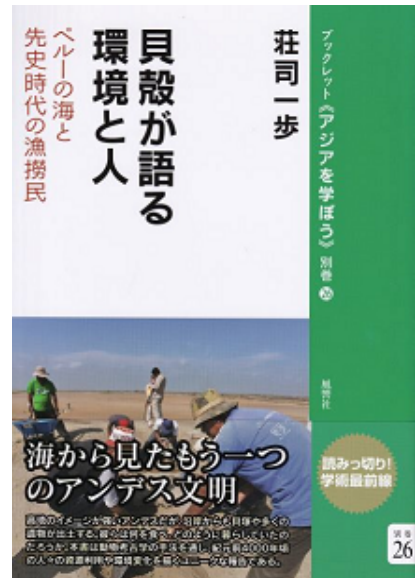
- アーリ、ジョン／加太宏邦訳（1995年）『観光のまなざし』法政大学出版局。
- ヴァンデルホフ、フランツ／北野訳（2016年）『貧しい人々のマニフェスト：フェアトレードの思想』創成社。
- 小國和子（2003）『村落開発支援は誰のためか』明石書店。
- 北野収（2017）『国際協力の誕生 改訂版』創成社。
- 北野収（2019）『南部メキシコの内発的発展とNGO 補訂版』勁草書房。
- スコット、ジェームズ・C／清水展ほか訳（2017）『実践 日々のアナキズム』岩波書店。
- Escobar, Arturo (2008) *Territories of Difference: Place, Movements, Life, Redes*, Duke University Press.
- Escobar, Arturo (2018) *Designs for the Pluriverse: Radical Interdependence, Autonomy, and the Making of Worlds*, Duke University Press.
- Uphoff, Norman (1992) *Learning from Gal Oya:*

*Possibilities for Participatory Development and Post-Newtonian Social Science*, Cornell University Press. ■

『貝殻が語る環境と人—ペルーの海と先史時代の漁撈民』（風響社、2021年）  
日本学術振興会特別研究員 PD・荘司一步

2017年の夏、ペルー共和国の北部、海岸地域に位置するクルス・ベルデ遺跡で発掘調査を終えた私は、考古遺物が詰まった大量のダンボール箱を前にして途方に暮れていた。先土器時代に属するクルス・ベルデ遺跡は、決して出土遺物の種類が多いとはいえない。しかし、貝塚という遺跡の性格もあって、貝殻や魚の骨などの動物遺存体が大量に出土していた。考古学研究では、発掘調査と同時に出土遺物の整理と分析作業がとても重要な位置づけを占めている。遺物から如何に多くの情報を引き出すことができるかという点に、研究の成否が左右されるといっても過言ではない。動物遺存体でいえば、そのサイズや重量を計測し、破片となった骨や貝殻から動物種を同定、そしてカウントするという作業が欠かせない。しかし、その作業には動物考古学についての専門的な知識が必要であるし、博士課程の学生だった私には、ペルー国内の専門家に分析を依頼する予算もなかった。それに加えて、出土したすべての遺物は文化財としてペルー文化省の管理下にあり、簡単に国外に持ち出すことができないことも状況を難しくしていた。これらの遺物を自分で整理・分析するためには、ペルー国内で活動するためのまとまった時間も必要となるわけである。

こうして途方に暮れていた私に光明が差したのは、帰国後、松下幸之助記念志財団（以下、松下財団）のポスターを大学で目にした時だった。



財団が募集していたのは松下幸之助国際スカラシップの奨学生であり、それは海外の大学や研究機関への留学を支援するプログラムであった。これを利用すれば、ペルーでのまとまった時間を確保することもできるし、ペルーの動物相に即した動物考古学を現地の大学で学ぶこともできる。これしかないと確信し、すぐさま研究計画を立てて応募した。その結果、幸いにも奨学生として採用してもらえることになり、一年間の研究留学が実現したのである。

2018年の夏、満を持して研究留学をスタートした私は、ペルー国立トルヒーヨ大学で動物考古学を学び、クルス・ベルデ遺跡から出土した動物遺存体を対象にその研究手法を実践した。その甲斐もあって、動物遺存体の分析作業は大きく進み、調査データを博士課程の研究の中うまく位置づけることもできた。あの時に財団のポスターを見ていなかったら、長い学生生活はまだまだ続いていたように思う。改めて、研究留学の機会を与えてくださった松下財団に深く感謝の意を表したい。